

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-110	14-012	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Alcohol consumption for different periods in life, intake pattern over time and all-cause mortality. 生涯の異なる期間における飲酒、飲酒形式と全死亡リスクとの関連の検討		
執筆者		
Jayasekara H, MacInnis RJ, Hodge AM, Hopper JL, Giles GG, Room R, English DR.		
掲載誌		
J Public Health (Oxf). 2014 Oct 15. doi:pii: fdu082.		
キーワード		PMID
飲酒、死亡リスク		25320075
要 旨		
背景： 従来から、コホート研究において、ベースライン調査時の飲酒データを用いて、飲酒と全死亡リスクとの関連の検討が行われてきた。しかし、生涯の飲酒量を含めて検討した報告はほとんどない。今回、生涯における異なる期間（生涯、現在、過去）の飲酒量と全死亡リスクとの関連を検討することを目的とした。		
方法： Melbourne Collaborative Cohort Study に参加した 40-69 歳の 39,577 名において、対象者には、20 歳から 10 歳毎のアルコール種類別の飲酒頻度と量を調査し、これらから、現在・過去・生涯の飲酒量を推定した。Cox 比例ハザードモデルを用いて、飲酒の死亡リスクに対するハザード比を算出した。		
結果： 平均追跡期間は 15 年で、追跡期間に 4,639 名が死亡した。生涯、現在、過去の飲酒量と全死亡リスクとの関連は J 型であった。生涯飲酒量が男性で 40g/日、女性で 10g/日の群が最もリスクが低く、飲酒量が増加するに従い、全死亡リスクも上昇した。男性において、非飲酒者と比較して、20 歳以降軽度-中等度飲酒（0-39g/日）を維持している者は死亡リスクが 16%低く、一方、20 歳以降高度飲酒（20 歳代 80g/日以上、現在 40g/日以上）を継続している者は死亡リスクの上昇を認めた。		
結語： 我々の報告は、軽度飲酒継続は死亡リスクを低減すること、および若年代からの高度飲酒の継続は死亡リスクの上昇と関連すること、を支持する結果であった。		